

今私たちの横に誰がいるのでしょうか

申京淑

(辻本武 訳)

今から私がお話ししようとするのを、先生は信じていただけなのでしょう。実は私も今日病院に行くまで、二ヶ月前の明け方に起きたこのことが事実なのか、幻影なのか、今でもはっきり分からないのです。その時々状況によつて事実でもあったし、幻影でもあったと言えるからです。その時に私のそばに夫と一緒にいてくれなかったなら、私は今も自分が夢を見たと思つていてでしょう。しかし夢にしては余りにも鮮明なのです。その日から今日まで、あの冬の晩のことを忘れたことがありません。事実だと思ふと心が動揺し、幻影だつたと思ふと一瞬の間ですが心が落ち着きます。そうこうしているうちにもう春がやつて来ます。あの日の晩は吹雪で根元から倒れそうになつたカリンの木にも、生気がみなぎり始めます。春の山を彩る多年草は、今ごろは雪の中で溪谷を流れる水音を聞いていることでしょう。ラシヨウモンカヅラやカメバソウといった草々です。ヒメハギやヘビイチゴなんかも聞いていることでしょう。

その日は起き上がつて、しばらくの間窓の外を眺めていました。

降りしきる雪が見えてきます。雪は朝から降ったり止んだりを繰り返していました。三月に降る季節外れの雪は、無性に人の心を騒がせます。未堂 徐廷柱(註)だったでしょうか? 「雪は降りながら、なかなかいいだろう、ちよつとしたものだろう、結構なものだろうといつて降るんだ」と言った詩人は? 今は題名を忘れましたが、昔はその詩を口にしながら道を歩いたものでした。忘れていても、雪が降りさえすれば自然と思ひ出す一節でした。今降っているあの雪は私にどのように語りかけていると言え、お笑いになるでしょうか? 余りにも悲観的な考えかも知れませんが、人はすべて心の中に何をもつてしても埋めることの出来ない空洞が存在すると私は考えてきました。私にもそんな空洞があり、そして私のこの空洞の中には今まで誰も入って来たことがないのです。こんな私のことをこと人様にしゃべろうとするのは初めてのことなので、文章としてまとまっていないかも知れませんが、ご容赦下さるようお願いします。さて雪の話です。雪が降って白く積るのを見ていると、私には不思議なことが起こります。それを見るといつも、なかなかいいだろう、ちよつとしたものだろう、結構なものだろう……という詩の一節が思ひ出され、喪失や欠乏でしかない私の空洞が白い雪で埋められるのです。

あつ、私の自己紹介をしていませんでした。

私は先生についてよく存じ上げているのですが、先生は私をご存知ないでしょう。挨拶もしないで前置きが長くなりました。私の名前は金ヒスと申しまして、年は三十一、結婚する前には出版社

で仕事をしていました。先生は覚えておられないでしょうが、先生がお書きになった文章の校正を私が担当したこともあります。『言葉にならないもの』という短い文章でしたが、ひよつとして思い出されたでしょうか。私が勤めていた出版社の広報の冊子に載った文章だったのですが、昔のことなのでお忘れになっておられるかも知れません。私が今書いているこの手紙を先生にお送りしようと思ったのは、先生だったら誰も信じてくれないような私の話を信じて頂けるかも知れないと思っただけです。いつでしたか先生は、夫と死別したある女性についての話をお書きになったことがありません。夫の遺骨を納めたお寺にその女性がお参りする度に、風も吹いていないのにその寺の建物の軒先につるされている風鐸が揺れて音を立てるといふ場面があったと思います。その時、その女性は心のなかで夫の名前を呼びます。そうすると風鐸は風もないのにさらにもっと揺れて音を出すというものでした。その一節を読んで私は目頭が熱くなりました。先生はその風鐸の音に女性の夫の魂が宿っているとお考えになったのではないのでしょうか？私はそのように受け取りました。先生はまたこのようなこともお書きになっていました。人が見る最も美しく愛らしく高貴なものには、生きている時に何も出来ずに亡くなった人たちの心が宿っていると。先生のお書きになった文章を読んで、先生はこの地球上には説明できないものが存在するということを確信しておられると思います。だから先生は二ヶ月前に私の身に起ったことをきくと信じて下さると思います。今日私が病院に行った時に、是非先生にあの日の晩のお話をお聞きいただきたいと思っただけです。

*

夫はその日の晩、先に目が覚めたのは自分だと思っているかも知れませんが、実は私の方がとつとつに起きていました。みぞれが降っている気配を感じたからです。生まれて七ヶ月の娘が水疱瘡に罹り、二年前の深夜にこの世を去つてから、私は山を友として我が国の隅々までを巡り歩いていました。娘は先天性の免疫欠乏体質でした。それだけではありません。右の脇の下に耳の形をした羽根のような瘤ができていました。世間では時々そのような子供が生まれると言います。医者は子供が大きくなれば普通は手術をしてこの羽根のような瘤を除去することが出来るのだが、この子は免疫のない体質だから手術出来るかどうか分らないと氣遣つてくれました。初めは氣味が悪かつたのですが、羽根だから絶対に大丈夫だと思ひました。子供が成長するのと同時に羽根も大きくなるように願つていました。娘に致命的なことがあるとすれば、その羽根ではなく風邪だということでした。私たち夫婦は子供がただひたすら風邪に罹らないようにしようと全力を尽くした七ヶ月でした。加湿器を二個ずつ動かしていつも室内の湿度を最適にし、外から帰れば手を洗つてうがいをして服を全て着替えて、窓を開けないで空気を入れ替えるために大型換氣扇を窓に取り付けました。しかし娘を襲つたのは風邪ではなく、意外にも水疱瘡でした。娘は手の甲や耳の下に至るまで、全身に蓮の花のような発疹ができました。他の子供たちは簡単な注射一本で治る水疱瘡なのですが、特異体質だった我が子は力なく逝つてしまいました。ここまで書くと、心が少し軽くなります。そ

れまで私は私に娘がいたということを、そしてまたその娘が十本のピンク色の指を動かしながら「オ……オンマ（ママ）」としゃべり始める時期に亡くなったということを、他人に知られたくありませんでした。子供を亡くして、悲しいとか苦痛だとか語ることさえ辛い心のパニック状態を何と表現すればいいのでしょうか。それからというものが、夫は私の前で子供の話を全く切り出そうとしませんでした。内面はどうだったのか知りませんが、夫は何事もなかったかのように自分の仕事に打ち込み、家庭生活も以前とちつとも変わらなかったです。夫は二ヶ月に一回は父が一人暮らしをしている沓溜（ムルチー江原道ある地名）を訪問し、その帰りに港に立ち寄ってイカのスルメ等を買ってくるのですが、そんなことまで子供が亡くなってからも同じでした。面牧洞の長兄の家での法事にも出たし、一年に二回ある夫婦同伴が原則の小学校の同窓会にも休まずに出るのも同じでした。違うことがあったとすれば、それはいつも一緒にいるはずの私がいなかったということです。私は夫が家を空ける時はいつも山に行きました。山が私を呼ぶのです。山に行けば抑えつけられていた心がほぐれ、ムラサキ草やサクラ草の姿を見て楽しむようになりました。次第に夫が家にいる日曜日にも、登山同好会と一緒に山を歩き回るようになりました。ご理解いただけるか分かりますが、私は、夫が娘を亡くしても相も変わらず会社に忠実であり、友人たちと酒を飲み、親戚付き合いにもいつも通りに顔を出すのを見ると、我慢できなくなりました。日曜日に一人で居間に座ってテレビを見ている夫の姿を台所から見ていたら、心の奥底から何かしら怒りがこみ上げてきました。毎朝いつも鏡の前で電気カミソリの音を立てて髭剃りをしている夫を見ると、夫が果てしなく遠い存在

だと感じるようになりました。そのような気持が積み重なってくると、自然と寢床を一緒にするところがなくなり、何度か言い争いをした後は夫もまた私の体に手を出すことがなくなり、いつの間にか別の部屋で寝るようになりました。彼と私との間の対話が段々となくなっていきました。お互い言葉をかけることもなく過ごすようになったのです。全てのことを相も変わらずに黙って続ける夫に、私は自分の気持ちを言わないようにしたので、本当に話をしなくなっていきました。むしろ最初からお前のせいだ、私のせいだなどと言いたいことを全て吐き出してひとしきり泣きわめていたら、これほどには冷えた関係にならなかつたでしょう。私たちの対話というのは、以前は夫が仕事で出張行くと電話をかけてきて「変わったこと、ない?」「はい。」「明日帰るよ。」「はい。」「程度だったのですが、次第に三・四日家を空けても電話をしなくなりました。こちらが「はい。はい。」と返事するだけや、電話がかかって来たとしても取りもしなくなつたので、そんな私に電話をかけたくなくなつたのでしょうか。そうだからといって、私たちの仲が特に悪いということでもありませんでした。夫は出張先でスカーフや殻付きのサザエや腕時計を私のプレゼントとして買ってきて、食卓の上に置くこともありました。私の趣味に合わせて冬山用の帽子だとか手袋、あるいはアイゼンを買って来ることもありました。一度は夫の方から「山に行こうか?」と聞いてきたこともありえます。私は「嫌だ」と返事しました。娘を亡くしてから一年後の夫は五〇人のうち三人しか選ばれない管理職試験に通り、出世しました。他の人々は希望退職やら何やらと不安な日々を送っているのを考えると、夫はむしろ安定している方でした。そのうちに夫はヘッドハンターからスカウトさ

れて、インターネットバンクとかいうベンチャー企業に転職しました。今のサラリーマン生活のま
まはビジョンがないが、今度は年棒が六百万ウォンにもなるという点、そして利益が出るとそれが
そのまま株式として貰えるという理由が夫の心を変えたようです。辞表を書く夫を私はじつと見る
だけでした。家族には何事も起きていなかったかのよう平気で自分の生活設計する人が私の夫だ
とは思えませんでした。転職先に初出勤する前日に新しい職場の様子を見に行つて来た夫が「これ
から自分の生活を百八十度変える必要がある。新情報が来ても何時間か経つともう古く役に立たな
い情報となつてしまふぐらいに変化が激しい職場なので、普段の生活をもっと密度濃く、もっと緊
張してやつていかねばならない。」と言つた時、私は「それはあなたの仕事のことですよ。」と、た
つた一言で夫の言葉を黙殺し、台所に入つてしまいました。

ひよつとして平然としていたつて？私にはそんなことは出来ませんでした。以前には時折会つて
いた友人たちとも、連絡をとらなくなつていきました。友人たちは娘が生まれた時に病院やチヨリ
ウォン（産後に養生する施設）に赤ちゃん用品やら三歳になつて履くような靴やらを買つて見舞い
に来てくれたのですが、そんな友人たちと亡くなつた娘の話避けて他の雑談をしながらお茶を飲
むことが私には出来なかつたのです。親戚付き合ひの場にも行かなくなつたのも同じ理由です。み
んなは私の前では笑つていても心の中では同情しているのだらうと思ふと負担になつて、私はそう
いうみんなと会わなくなつていきました。先に書きましたように、代わりに私は山に登りました。
以前は山好きの人間ではなかつたのですが、おかしなことに山に心が引かれたのです。内雪岳や、

五台山、曹溪山、摩尼山、雲岳山、無等山、内蔵山、鷄竜山、小鹿島の八影山まで回りました。この秋は山で暮らしたようなものでした。一泊二日や二泊三日の日程で一週間に一回は山岳会の方と一緒に山登りをしましたし、それ以外の日でも私は明け方に起きて夫の朝食を簡単に支度しておいてから、リュックに柚子茶と何個かの蜜柑を入れて山に行きました。早朝バスに三十分ぐらい乗って舊基（クギ）トンネル前で降り、北漢山に行く登山道を登ります。冬になって朝雪が降ると、必ずとっていいほど北漢山に登りました。夫が買ってくれたアイゼンなんかはしないまま登るので

娘が私たちの元から去ったその日の夜も雪が降っていました。小さな体の娘がピンク色の指を小刻みに震わせ、苦しく荒い息をしていた時、窓には雪がとめどなく降り続いていたのでした。夫がぶるぶる震えていた娘の小さな体をその後どんな手順で葬式をしたのか、私は知りません。子供が息を引き取った直後、私は呆然となって姉の家に行き半月ほど横になって、それから家に帰ったのです。姉によると、夫が一人で子供の葬式をしたといいます。私は亡くなった子供をどのように見送ったのか夫に聞くことが出来ませんでした。もし私がそれを聞いて夫が答えたなら、私たち夫婦の間はそれで終わりになるような気がしたのです。私は娘に対する思いを胸に抱いて、山ばかり登りました。特に冬山です。私が冬山に愛着を持ったのは、冬山が危険であるからでした。理由はともかく、私は生まれて七ヶ月しか経っていない子供一人を十分に守り切れなかった母親なのです。時間が経つほどに自責の念が少しずつ大きくなり、雪の降る日に頂点に達するのです。雪が積もる

山へ行こうとする度に、もうこの家に戻らないと心に決めて玄關を閉めるのでした。家の庭のカリンの木をちらっと見てから山に行きました。雪に覆われた岩や凍りついた溪谷に自分が閉じ込められることを夢見ていたのです。ラインホルト・メスナーというアルピニストが書いた『死の地帯』という本を經典のように持ち歩きました。それによれば、弱い存在でしかない人間は死と背中合わせという極限の領域ではほとんど不満を持たなくなるといいます。むしろその限界領域では、生命は新しい次元として認識されるのです。そして自分と周りの世界が完全な合一を成しているという感情まで生まれるのです。つまり限界領域において、存在の次元はさらに広がるのです。そうだからでしょう。アルピニストたちは負傷してもまた体を奮い立たせて山に登り、墜落しても体が回復すればまた山に行くわけです。しかし私は自然の最高地点でそんな自分を感じたいのではなく、そこに行く途中で墜落や負傷することを、しかも取り返しのつかない致命傷を負うことを願っていません。ところが不思議なことです。山に行くと、口の中の舌のように全身が温かくなるのでした。ウソのようですが、私はかちかちに凍りついた山で滑って転んだことが一度もありませんでした。積った白い雪の下につるつるした氷が隠れているような谷道でも、私は尻餅を一度もつかなくかったです。雪が降ってこんもりと積ると、あたり一面が誰も通ったことのない処女地のようになります。ラッセルの痕跡一つない雪山に登ってみると、すごく息切れします。時々そのまま息が止まるほどにもなりますが、倒れてへたり込むことはありませんでした。むしろ山は私がさくさくと雪を踏みながら登ると左右から私を守ってくれるようでした。見通しのいい峠に出ると、雪の上で横になっ

て空を見ることもありません。山の頂上に到着すれば、先ず初めに白い雪の上に娘の名前を書きました。時折「お前を忘れていない」と書き足しました。清涼山の連珠峰で、あるいは金岩山の雪に覆われた奇岩怪石の上で、またあるいは文殊山の屏風岩で、そして太白山の蓮華峰で、です。そのように雪で覆われた峰や岩に娘の名前を書いているうちに、私は冬山にとっても親しみを持ち、雪の降る気配にも非常に敏感になりました。雪が降り始める時に広徳峠を出発したら大雪に見舞われて、途中で広徳農場に避難しました。休憩してから切り立ち岩を通り過ぎ、福桂山の水皮嶺までまるまる三泊四日かかりました。山の専門家三人と一緒に無事に踏破できたのであって、一人では絶対になり得ない行程でした。高い所では本当に怖かったです。山の上での四日間は雪が止んだかと思うとまた降ってくる、の繰り返しでした。雪と何度も繰り返る間は気が失って倒れそうになります。さらに雪の表面は陽光と風で固くなっているのですが、そのすぐ下は柔らかい雪の粉末でした。何と言ったらいでしょうか。綺麗な小麦粉のような白い粉雪の上に薄いビニールを載せて置いたようなものと言いましょか。一緒に行った山の仲間たちは何回もこの雪の落とし穴に腰までは落ち込んで手足をばたばたさせたのですが、不思議なことに私はそういうことはありませんでした。風が吹いて横殴りの吹雪の時でも、私は雪の落とし穴に落ち込むことがなかったのです。雪の白さに目がまぶしくて開けられなくなった時でも、どうにかこうにか前進することが出来ました。あちこちで雪の重みに耐えられない木の枝がぼきと折れる音が聞こえました。雪の被った岩の後ろにノロジカが隠れているようなこともあり、イノシシの足跡も見つけました。私は木の枝か

ら続けざまに落ちる雪を頭から被って白クマのような格好になって縦走をやり遂げたのですが、それからはどこにいても雪の気配が分かるようになりました。台所でネギの根を摘み取っている時も雪の気配が直ぐに分かり、また寝ているも雪が降れば直ぐに目が覚めます。雪が降っているようだと感じた瞬間、降りしきる雪で白濁した空、東西に伸びる山並みに葉を全て落としたカラマツの上に咲いた雪華、雪の上に捺された山猫の足跡、雪の海といわれていた雪上の風紋などが直ぐに頭に思い浮かび上がります。まばゆい白さの積雪の山の中で見た山猫の足跡は際立っていました。一瞬で鶏やアヒルの命を奪っていく獣は、雪の上に足跡を付ける時も雪を蹴散らすように足跡を付けているのです。

その日の晩も、私は雪の気配に目が覚めました。目を開けて窓にちらつく雪の影を見ました。風が吹くのか、雪の影は揺れていました。私は窓にちらつく雪の影を見ながら暗闇の中で横になっていたのですが、夫が部屋のドアを開けて出る気配を感じました。部屋から出た夫が玄関の方に歩いて行く音が聞こえたのです。この時間にどこへ行こうというのか？私は暗闇の中で横になったまま、ずっと窓に映る雪の影を見ながら夫の気配に耳をとがらせていました。表門が見える引き戸の前で、夫のスリッパの音がびたっと止まりました。夫は何をしているのか、周囲はしんと静まり返っていました。そして何の音もしないまま三・四分ぐらいが過ぎました。夫が引き戸を開くか、それとも引き戸の横に取り付けている新聞受けに入った新聞を取り出す音でもするのかと思っていた

私の方が緊張して、揺れる雪の影から目を離して体を半分起こしました。

「おい。」

十分ほど経って私を呼ぶ夫の声が聞こえました。「おい、おい」久しぶりに聞くので、本当に私を呼ぶ声なのかと思いました。何の用なのか？私は気になりましたが、そのままにしておきました。特に変わったことではないと思つたのです。スリッパを履いて表門の方に行く足音だけが聞こえて、何か壊れるとか、カタカタとかの音は聞こえなかったからです。私が出て行かないでいると、滅多にそういうことはしない夫が、私が寝ている部屋のドアの前に歩いてきてソックをしたのです。私がドアを開けると、夫が尋ねました。

「門を叩く音、聞こえなかったか？」

私は首を振りました。

「不思議なことだなあ……はっきりを門を叩く音だったのだが……僕がその音で目が覚めたんだが……」

夫は暗闇の中で一人つぶやくように言いました。

「聞き間違えたんでしょう。この時間に一体誰が……」

深夜の三時が過ぎていました。私は誰がこの時間に門を叩くというのかと、ちょっと腹を立てました。夫は少しきまり悪かったのか、頭を搔いていました。白色のチェック模様の寝巻のボタンが二つほど外れて乱れている姿でした。しばらく立っていた夫がびっくりした顔をして、また表門を

見ました。

「ほら……門を叩く音だろう！」

私はいぶかしい思い、その時になって電気を点け、夫を見ました。明るい中に現れた夫の目は激しく動揺していました。

「何の音が聞こえると言うの？」

「今さっきも……お前も聞いただろう！」

私はそう言う夫をじっと見ました。夫は本当に門を叩く音を聞いたという表情をしていました。

「だったら門を開けてみなさいよ。」

夫はしばらくためらっていました。表門に向かって「どなたですか？」と尋ねました。何の答もありませんでした。当然です。私は門を叩く音が聞こえなかったのですから。夫は震えて動こうとしないようなので、私が引き戸を開けて出て、表門を押し開きました。

「誰が来たというの？」

吹雪が吹いている深夜でした。門を開けるや外で激しく回っていた風がヒューツと家の中に入ってきました。

「見てよ……誰もいないじゃないの。」

私は門をさらに開けて見ました。門の外は誰もいませんでした。庭とは言えない三・四坪の裏庭で雪を被ったカリンの木が、今にも根が抜けるかも知れないぐらいに揺れました。木の枝に積もつ

ていた雪が、ざあっとこぼれ落ちました。

「吹雪の音が聞き間違えたみたいよ。」

「……」

私たちが三年前にローンを組んでこの家を買った時、今は亡くなった義母がカリンの木を植えてくれたのですが、その木の下にも雪がこんもり積っていました。風が激しく吹き込むために、積っていた雪がヒューヒューと音を出しながら庭を飛び散りました。私がまた表門を閉めて風が入らないようにすると、夫はスリッパを履き、私に後姿を見せて、さっきまで寝ていた自分の部屋に歩いて行きました。頭を傾げ、一方の肩をだらんと下げたままでした。

私は部屋に戻って、窓にちらつく雪の影を見ながらちよっと布団なかを寝返りしながら、一瞬寝入ったようです。その時パチャパチャという水の音が私の耳の中に入り、目が覚めました。初めは吹雪の音なのかと思いました。しかし明らかに風呂に張っておいたお湯がパチャツと立てた音でした。音は段々とさらに鮮明になっていきました。夫がお風呂に入っているのだろうか、しかしそうではありません。夫はお風呂ではなくシャワーをする人だからです。今思い出してみれば、無意識のうちにその音を誰が出しているのか、分かっていたのでした。そうなのです。私とその音を忘れてしましようか。私は寢床からすぐに起きて、浴室の方に歩いて行きました。外は相も変わらず吹雪が吹いています。庭に積もった雪明かりで、居室は電気を点けなくても明るかったです。積った雪が風で舞い上がる様子が居室のブラインドに映し出されていました。そしてパチャツというお湯

の音がずうっと聞こえてくるのです。

娘はお風呂に入って遊ぶのが好きでした。私がお風呂にお湯を張り、手を浸けてお湯の温度を見ているのです。水の中に小さなチューブを入れてやると、そのピンクの小さな手でそのチューブを手繰り寄せては放し、手繰り寄せては放しながら、きゃっきやつと笑っていたのです。自分でふざけて水を手のひらにすくって私に撒いたり、その柔らかい足でお湯をざぶんざぶんと蹴ったりもしていたのです。

私は浴室の扉の前で十分ちよつと立っていました。

お湯で濡れている娘の髪を上撫で上げてやる瞬間が、私は好きでした。きれいな額の上ですべした産毛を見るのも、低い小鼻にくっついてお湯を拭いてやってくすぐってやるのも好きでした。脇の下には相変わらず耳に似た羽根がくっついていました。その羽根を触ると娘は幸せな笑い声をあげていたのです。手術が出来なければどうしようかと思いましたが、このように小さくかわいいた羽根を誰でも持っているでしょうか。私は子供を洗ってタオルに包み、胸に抱いてやることも本当に好きでした。人の肌の匂いがこのように香しくもあるんだと実感しました。

浴室の中から聞こえてくるお湯の音に、私も思わず夫を呼びました。「ちよつと、あなた、あなた」何回も大きな声で呼びました。夫は部屋のドアを開け部屋から出てきて、私を見ました。

「こっちに来て見てよ。」

「……」

「お湯の音が聞こえるのよ。」

「……」

「お風呂に入っているのよ。」

夫が私のところに近寄って来た時、お風呂から聞こえていたお湯の音がぶつ切り切れました。私はしよげてしまいました。それでも夫が浴室の電気を点けようとするのを止めました。何だか電気を点けてはいけないと思ったのです。暗闇の中でぼんやり立っていた夫が、今度は浴室の扉を開けたのです。誰もいませんでした。浴室の窓から漏れ入ってくる白雪の明かりがお風呂をほの白く照らしているだけでした。便器やシャワー、タオル掛け、タイルなどはからからに乾いたままです。静まり返っていました。夫の電気カミソリもでした。娘がよく遊んでいた青色のチューブは、棚の上にあって窓から入ってきた雪明かりに照らし出されていました。チューブをしばらく見て、私は夫が浴室の扉を閉めるより前に、さっきまで寝ていた部屋の方に歩いていきました。部屋のドアを開けた時に振り返って見ると、夫が私を見ていました。

「吹雪の音を聞き間違えたのかしらねえ。」

夫は答えることもなく、そのまま立っていました。私は部屋に入らずに居間に行き、ベランダ側のブラインドを上げました。夫も居間に出てきて、私の横に立ちました。私たちは一緒に立ったまま庭を眺めました。一匹の野良猫が雪の上に足跡を付けて、カリンの木の下を通り過ぎました。尻尾で雪を撫でながらです。風が激しくなる度にカリンの木がしななって、積っていた雪が周囲に飛び

散っていました。吹雪を見ながら、そのように五分ぐらい立っていました。娘があのように亡くなってから、私たちが何か一つを一緒に見ながら立つのは初めてのことでした。何度も胸が張り裂けそうになるので、それ以上立っておられませんでした。

「戻って寝てくださいね。」

私は夫をベランダに残して、自分が寝ていた部屋に戻りました。寝床は冷めていました。私は体を丸くして窓に映る雪の影を見ながら、夫がベランダから部屋へ歩いて行く音を聞きました。また寝ようと、十五、十六……と雪の影を数えていたのですが、寝入ることが出来ませんでした。私は手探りで本棚からジョルジュ・スーラの画集を取り出し、窓辺でうつ伏せに寝ころびました。電気を点けたくなかったのです。どれぐらい過ぎたのでしょうか。この世を照らす雪明かりで部屋の中は明るかったです。先生。ひよつとしてスーラの絵の中で、「クランド・ジャット島の日曜日の午後」という絵をご存じではないですか？一八八六年八月の絵ですから、百年も前に描かれた絵です。あっ、私の姉が画家だと申し上げましたでしょうか？作品を画廊に出しても買ってくれる人がいる程有名ではなく、そうだと言っても全く無名でもない画家です。スーラの画集は姉のものだったので、娘を失くした晩に、姉のアトリエ兼寝泊まり場所である家に行つて半月ほど泊まっていた時、偶然にスーラの画集を開いて見ました。何気なく画集をめくっていると、ある一つの絵の前に私の目は釘付けになりました。

「白い服を着た少女」。「クランド・ジャット島の日曜日の午後」のための習作。一八八四〜一八



クランド・ジャット島の日曜日の午後

八五・デッサン。三〇・五cm×二三・五cm。ソロモンR。グッゲンハイム美術館、ニューヨーク。目も鼻も口もない少女が、薄暗い光の中で白い帽子を被り、ノースリーブの服の下には腕がなく、宙に浮かんでいるように立っていました。デッサンだったからそうだったのでしょか。白い帽子はあるが顔がない少女、ノースリーブの服はあるが腕がない少女、膝の上に白いスカートはあるが足がない少女。

形のない白い光に包まれている少女を見ると、私の唇は震え、心は限りなく孤独感に陥りました。その時になって、何気なくちらっと見ただけの「グランド・ジャット島の日曜日の午後」という絵をもう一度開いて、じっくり見ました。この絵は何度も見ていたのに、何気なく見過ごしていました。休日の午後、グランド・ジャット島へ散歩に出かけた人たちがそれぞれのポーズで座り、立ったりしています。小川が流れる森の中にたたずむ人々は平和そうに見えます。パイプを口にくわえている男、丸く膨らんだ服を着ている若い婦人、リード紐をして散歩に出る猿、遠景には楽器を吹く男……この中で、白い服を着た少女を探し出しました。「ここにいるんだ」と自然とため息が出ました。少女は「グランド・ジャット島の日曜日の午後」の真ん中で、日傘をさした若い母親の手を握って立っています。これまで何回も見た絵だったので、一度もこの少女が目につかなかったのです。絵の中の「白い服を着た少女」は、白い帽子の下にピンクの顔が、また袖のない服の下に長い腕が、そして白いスカートの下には可愛らしいふくらはぎがありました。この少女を見てやっと安心したのですが、その時になって初めて私は「グランド・ジャット島の日曜日の午後」

の中の登場人物にほとんど表情がないことを知りました。全てが平和なのですが、絵の中の人物はみんな硬直しているか無表情だったのです。そのような表情のない人々の中で、少女は神秘的で謎の人物のように立っていました。たくさんの人々の中で最も中心に立っていないながらも、私はその時まで気付かなかった「白い服を着た少女」を見ながら、姉の家で泣きはらしました。とめどなく涙が出てきました。

姉の家を出る時、このスーラの画集を持って来ました。それから広げて見ることはなかったこの画集なのですが、あの日の晩にまた広げたのです。部屋の中を明るくしてくれている雪明かりに頼って、画集を一枚一枚めくり「白い服を着た少女」を探しました。たった一回しか見たことのないこの少女が、声が出ないほどに懐かしかったです。吹雪の夜だから、余計にそうだったかも知れません。「白い服を着た少女」は、前と同じ所で白い光に包まれていました。いま嵐のような風が吹いています。カリンの木が根こそぎ飛んでいき、表門も壊れて飛んでいき、屋根も巻き上げられて飛んでいき、部屋で黙ったままにいる夫もみんな飛んでいき、遂には家全体が飛んでいってしまふような激しい風の晩です。ひどく吹雪く音を聞きながら、私は「白い服を着た少女」の形ない顔に自分の顔を当てて、一瞬寝入ったようです。ふと目が覚めて少女の顔から私の顔を離れた時、窓に入り乱れていた雪の影が消え、この世にあるものを全て吹き飛ばしてしまふぐらいの風も止んでいました。周りは静かでした。少女の顔に私の頬を当てて、また目をつぶろうとした瞬間でした。あの音。カリンの木の下で震えている猫が、また風が吹くのか、と鳴く声のようでもあり、広徳峠

の縦走時にラッセルで雪を踏んだ時に出る音のようでもありました。そうこうしているうちに、私はぎくりとしました。その音は、娘のまだ言葉になっていない時の声だったのです。私は画集を持ったまま、やおら起きました。娘の声がはっきりと聞こえたのです。

ある夕暮れに、背中におんぶしていた娘が初めて声を出した時のその喜びを私は忘れましょうか。その小さな唇を動かしてアウアウと言うので、私は非常に驚いて台所仕事の手を止めたのですが、持っていた包丁で手を切ってしまいました。世に向かって意味なく初めて口から出てくる子供の、綿飴のようなふわふわして愛らしい声を私が忘れるでしょうか。それこそ柔らかく透明だったあの声です。澄みきった水があふれて私の顔に流れて来るような新鮮な喜びを与えてくれたあの声。それからしばらく経って、娘はそのアウアウという声で冷蔵庫の中からおいしいものを取って食べさせてくれ言うようになりました。娘が冷蔵庫の前まで這って行って、冷蔵庫の扉をその小さなこぶしで叩きながらアウアウと言うと、私は笑いながらイチゴを取り出してすりつぶしてやったり、ヨーグルトを取り出してスプーンですくって食べさせました。半分は私が食べましたが。

私が部屋のドアを開けて出ようとした時、夫もちょうど自分の部屋のドアを開けて出るところでした。私たちは互いに体をぶつけるくらいに並んで冷蔵庫の前に立ちました。電気を点けようとする夫に私が「点けないで。」と小声で制止しました。どういふ訳か電気を点ければ声が消えてしまうような気がしたからです。しかし電気を点けなくても、夫と私が冷蔵庫の前に立った時には、声は

止まっていました。

「お前も聞いたのか？」

「あなたも？」

「うん。」

私は、それが娘のアウアウというあの声だったということをお底言えませんでした。夫も私に到底言えないようでした。庭に積もっている雪明かりが居間を明るく照らしていました。

夫が冷蔵庫の冷蔵室と冷凍室の扉を同時に開きました。キノコやイワシあるいは緑豆モヤシが入ったおかず容器、白菜キムチが入った大きな容器と大根キムチの入った小さな容器、冷凍室のサワラやタラ、カツオの切身か、エゴマやシヨウガの粉末、インジヨルミ（きな粉餅）等が目に入りました。ヨーグルト、牛乳、マテガイの身、リンゴとメロンの半かけらまでも。野菜室に入れておいた葡萄ジュースと刻んだヨモギをパックに入れておいたものや、チシャ、春菊、白菜の半株も見えました。大根の真ん中の部分もです。声は消えてしまいました。冷蔵庫からこぼれ出る黄色い明かりだけが、夫と私の裸足を照らしていました。夫の足は寒く見えました。私は牛乳パックを取り出し、口に当てて半分ぐらい飲んで、「あなたも飲む？」という意味で牛乳パックを持ったまま夫を見ました。夫は首を振りしました。冷蔵室と冷凍室の扉を閉めると明かりが消え、台所は暗くなりました。冷蔵庫は静かに、そしてぼんやりと立っているだけでした。私たちは暗い台所の冷蔵庫の前で、道に迷った人みたいに立っていました。

「忘れていた……あの日が今日なんだ。」

「……」

「お前も知っていたか？」

「うん。」

娘がこの世を去ってから、夫と娘の話をするのは初めてでした。私たちはこれ以上言葉を繋ぐことが出来ず、雪の重みに耐えかねてぼきんと枝が折れる冬山の木のように、冷蔵庫の前で体を折って座り込みました。そしてベランダのブラインドに雪の影がまた映るのを見ていました。白く積っている雪の光が台所の窓から入ってきて、台所が明るくなる時までじっと見ていたのです。食卓の椅子の輪郭が見えて、食卓のテーブルの上に置かれている味塩や胡椒が入っている小さな銀色容器も見えてきました。私は思い出したように膝をそろえて、床に落としたスーラの画集を拾って夫に見せました。一枚一枚めぐり、「白い服を着た少女」を夫に見せてやったのです。形ない少女をまづ見せて、そして次に前の頁をめくって完成された絵の中の少女を見せました。夫は座り込んだまま、白い服を着た少女をじっと見ていました。私は夫の顔を見ないで尋ねました。

「子供の遺骨をどのようにしたの？」

「……」

「何？」

「山に埋めた。」

「一人で？」

「うん。」

「どの山なの？」

「山に。」

「どの山なのよ？」

「山に。」

「山に。だからだったの？ だから山に行くと、特に雪山に行くと、寒いはずなのに体は温かくなり、心が安まったということなの？ 誰かが私を守ってくれていると思っていたのだけれど、それは娘だったということなの？あの子がいつも私のそばに付いてまわってくれていたということなの？」台所の窓から入ってくる雪明かりに照らし出された夫の顔をじっと見ました。「あちこちの、山に：：」と答えた夫は泣いていました。娘を亡くしても何一つ乱れなかった夫、だからこそ全ての生活をきちんと正していかうとしていた夫が、ボタンが二つも外れてしわが寄ったパジャマを着て、口をよじりながら泣いていたのです。一人で娘の遺骨を山に埋めた男が、そして何事もなかったかのように昇進試験を受け、ヘッドハンターでもっと年棒のいい会社に転職した男が、ついに私の胸に顔をうずめ、声を出して泣きました。私のパジャマの裾がびっしり濡れるぐらいにです。吹雪は止んでおり、庭にこんもり積った雪から発した白い光は居間を通って台所まで入ってきて、夫を白く照らしました。この涙を隠すために、この男はあのように乱れずに落ち着いた姿を作って

過ごしていたのです。親戚の法事に出て、いつもと同じ表情で友人に会い：：止まることのない夫の涙を見ながら、あらゆることを以前と同じ通りにやることの方が、私のように最初からしないとするよりもずっと辛かっただろうと思いました。それを分かせてやろうと娘は訪問客として激しい吹雪のなかをやって来たのです。私は泣きじゃくる夫を深く抱きました。可哀そうな人。私は二つ外れていた夫のパジャマのボタンを全部外して、夫の胸に自分の顔をうずめました。夫はひどく痩せていました。私は飛び出た彼の背骨や手首の骨を指で包んであげました。夫が私の胸をまさぐり、私たちは雪明かりが白く広がる台所の冷蔵庫の前で、二年ぶりの愛を交わしました。夫の痩せた骨が白い雪明かりを受けながらゆっくり動き、時々冷蔵庫にぶつかると。彼の温かい息が私の心の中の隅々まで広がってくるように感じた時、私は夫の耳にささやきました。『白い服を着た少女』はニューヨークのクゲンハイム美術館にあるのよ。」と、そして「いつかきつと行ってみましょうよ。」と。

*

いま私の話は終わりました。私が病院へ行ったのは、何日前から嘔吐をし、胸の中がむかむかしていたからです。吹雪の中を私のところにやって来た訪問客は、九月になると子供が授かると言ったのです。病院の周りにあるレンギョウに芽が出ているのを見ました。空には雪が振り撒かれて

いるのを、木々は自分には関係ないとばかりに芽を出します。一個一個の芽は直ぐにでもほころぶくらいに膨らんでいました。病院に来る前は、世の木々がこのように我先に春を待っているとは思っていませんでした。山の上の雪も溶けたのでしょうか。私が山の峰や奇岩怪石、屏風岩に積もった雪に刻んでおいた娘の名前も溶けたのでしょうか。その名前に付け加えていた「お前を忘れていない」という字句も水になったのでしょうか。病院を出て、三月の遅い雪がちらつく都会の街路樹の下を歩き回りました。ひよつとして今冬最後の雪かも知れません。病院の庭のレンギョウだけでなく、街路樹として植えられている銀杏の木も盛んに水を吸い上げているところです。もうすぐ幼子の耳たぶのようなつじが咲きます。続いて白モクレンが、そして紫モクレンが前後して咲き始め、ヤマグミが散る頃になると山のリスタたちが、いばらの中の赤い野イチゴをついばんで食べることでしょう。

自分のことをすっかり書き尽くしたからでしょうか、深い息が自然と出てきます。ひよつとして先生が私の話を読んで、何かお書き下さらないかと期待しています。ずっと前に私が校正した先生の原稿を探してみました。それは先生の「書き手についての夢の一節」という原稿で、今またそれを読んでいます。そこにこのような一節がありました。既に消えてしまっているものをまた呼び戻して、そつと触れるようにしたいし、自然の匂いに浸るようにしたいという夢。そして今この瞬間を永遠に閉じ込めておきたいという実現不可能な夢。今もその時と同じ考えをしておられるなら、私の心をきつと察して下さるだろうと思っています。私の個人的な願いは、やむを得ない事情で大

切な人を失くして心を閉ざしている人たちに、吹雪の中で私たちを訪ねて来てくれた訪問客の存在を知らせてあげたいことだけなのです。今朝病院へ行く時までには、自分自身あの訪問客が本当に私たちを訪ねてきたのか、それとも単なる幻影だったのか、はっきり分からなかったのですが、今はあの晩の訪問客の温かい存在を確信しており、この手紙を書いています。

先生。春が来てもハクセンの草の白い根が土の中で膨らんでくるようになるまでは、雪がうっすらと積もる山道に気を付けてください。その下が、つるつるした氷になっているものですから。それでは、さようなら。

『東西文学』二〇〇〇年春号)